資料2－3

立命館大学における教育実習・学校体験活動について

–学校インターンシップ（中等）・分散型教育実習（初等）の現状と課題–

令和4（2022）年2月21日

立命館大学　森田真樹

立命館大学の教員養成の概要

16学部21研究科　学部生約33,000人　大学院生約3,000人

【衣笠キャンパス】（5学部）
法学部　産業社会学部　国際関係学部　文学部　映像学部

【びわこ・くさつキャンパス】（7学部）
経済学部　スポーツ健康科学部　食マネジメント学部
理工学部　情報理工学部　生命科学部　薬学部

【大阪いばらきキャンパス】（4学部）
経営学部　政策科学部　総合心理学部　グローバル教養学部

【朱雀キャンパス】（2研究科）
法務研究科　教職研究科

立命館大学の教員養成の概要

教職課程を設置する学部（9学部）

【衣笠キャンパス】（5学部）

法学部　産業社会学部　国際関係学部　**文学部　映像学部**

【びわこ・くさつキャンパス】（7学部）

経済学部　スポーツ健康科学部　食マネジメント学部
理工学部　情報理工学部　生命科学部　薬学部

【大阪いばらきキャンパス】（4学部）

経営学部　政策科学部　総合心理学部　グローバル教養学部

＊赤字の学部は、2019年の再課程認定を期に、教職課程を廃止

立命館大学の教員養成の概要

取得可能な一種免許状

小学校　（産業社会学部現代社会学科子ども社会専攻：50名）

中学校

国語　数学　英語　社会　理科　保健体育

高等学校

国語　数学　英語　地理歴史　公民　理科　保健体育
情報　工業　（以前は、商業、福祉も）

特別支援学校（知・肢・病）

立命館大学の教員養成の概要

履修者・免許取得者・採用者

教職課程履修者　　全体で2,000人程度
（2015年：約3,300人）

教員免許取得者（実数）　　312人（2020年度）
（2009年：699人、2015年：501人）

教員採用試験合格者　　現役120名、既卒140程度
（例年250人～300人程度）

- この10年で教職履修者、教員免許取得者は、およそ半減。
- この1，2年は若干の回復傾向
- 教員採用者数は、微減程度にとどまっている。

「学校体験」の場の多様化

①教育実習（教職科目として単位授与）

②学校インターンシップ（教職科目として単位授与）

・大学が独自に実施

・教育委員会のプログラムとの連携で実施

京都府「教員養成サポートセミナー」（大学と連携して実施）

神戸市「スクールサポーター」（大学として送り出す）　など

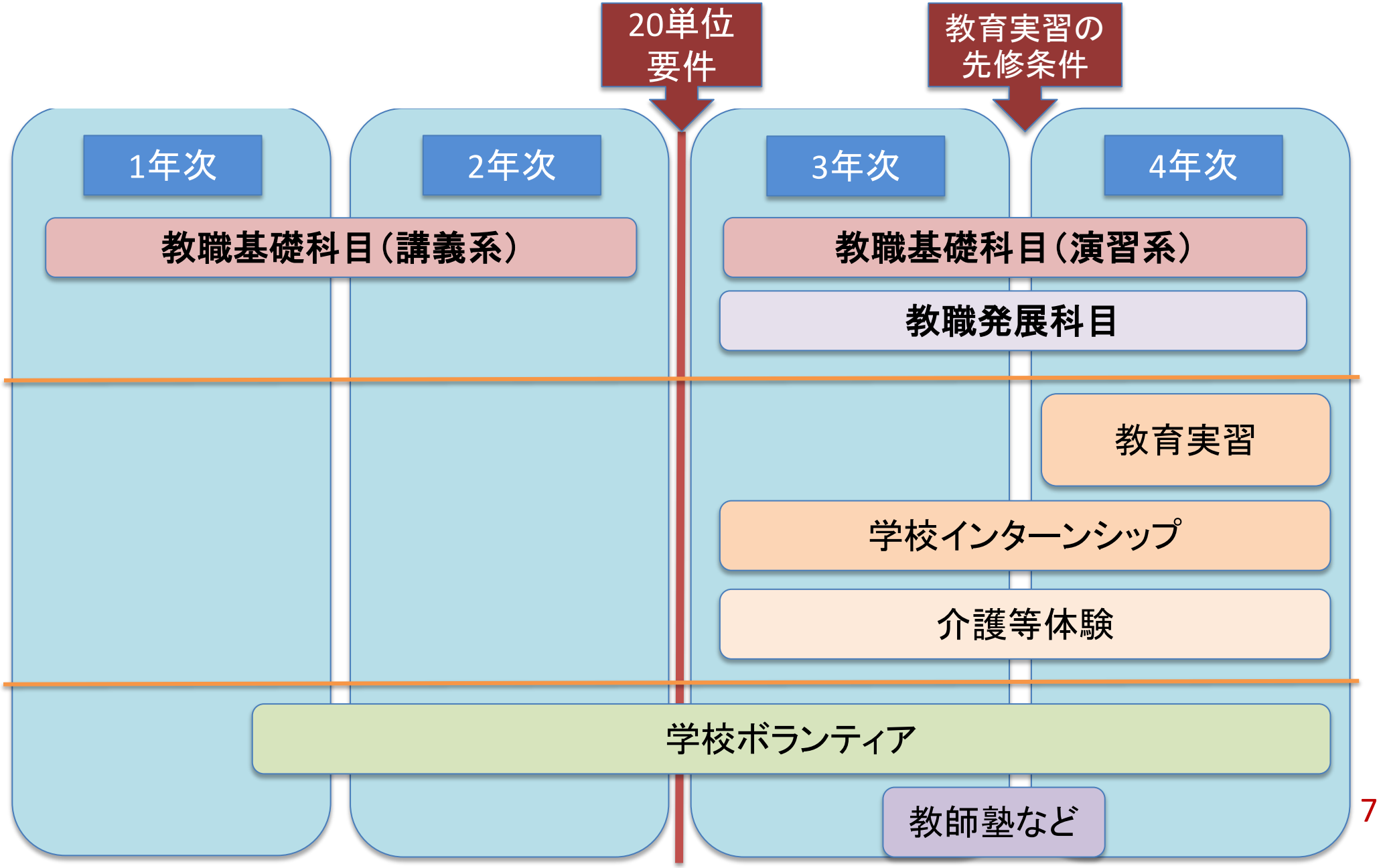
③学校ボランティア（単位授与なし、学生の自主的参加）

・募集主体は多様（教育委員会、教育局（事務所）、学校）

④介護等体験（教職科目として単位授与）

（⑤教育委員会単位で実施される「教師塾」の実地研修）

カリキュラムの構造（中等教職課程）



「学校インターンシップ」の概要

- 2003年度の試行段階を経て、2004年度から本格実施
- 導入当初は、科目「国内インターンシップ」として単位認定
- 2010年度入学生以降は、教職科目（「独自科目」）として単位認定

- 「学校インターンシップ」は3年生以上が履修可能

1･2年次　学校ボランティア → 3年次　学校インターンシップ → 4年次　教育実習

「学校インターンシップⅠ」(2単位)・・・・40時間以上の研修
「学校インターンシップⅡ」(3単位)・・・・70時間以上の研修
「学校インターンシップⅢ」(4単位)・・・・100時間以上の研修

長期分散型
短期集中型

- 特定の業務に偏ることなく、教員の仕事を広く体験できる場となるように大学から依頼し、応募のあった学校に学生を送り出す。

- 募集方法等の詳細は、別紙の「実施要項」をご参照ください。

「学校インターンシップ」の流れ

1月～3月
受け入れ希望校集約

4月上旬
募集ガイダンス
（R3年度は動画）

4月～5月
選考・許可

5月～6月
受け入れ校での
面談

6月中旬
事前指導

6月～12月
研修
事後指導

①受け入れ希望校集約

- 「学校インターンシッププログラム募集要項」を関連する教育委員会・学校に配布・集約
- 近隣教育委員会・校長会、受け入れ実績のある学校などに配布

→例年、京都、滋賀、大阪の100校以上から申し込みがある。
（短期集中型・長期分散型、時間数（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）の組合せは多様）
→学校種の割合は毎年変化するが、約7割が小学校、約2割が中学校で、高等学校・特別支援学校は少ない傾向。（募集要項の配布方法との兼ね合いもある）

□ 開始当初は、各学校で「活動内容」を自由に記載できるようにしていたが、内容があまりにも多様で、単位授与にはそぐわないと思われる内容もあった。また、受け入れる学校の側だけでは、「学校インターンシップ」に適切な研修内容を判断することが難しいという意見もあった。

↓

□ そこで、現在は、次頁の研修内容例を「募集要項」で示し、その中から複数を選択してもらう形式で募集をしている。

「学校インターンシップ」の流れ

【「募集要項」で示している研修内容の例】

以下の中から、複数の内容を組み合わせた研修内容を依頼している。

- **各教科の授業における指導補助**
- **道徳教育における補助**
  - 道徳の授業
  - 職場体験活動・ボランティア活動・自然体験活動
  - 情報モラルに関する指導
- **総合的な学習（探究）の時間の授業における指導補助**
- **特別活動の授業における指導補助**
- **小学校におけるクラブ活動及び外国語活動における補助**
- **中学校・高等学校における教育課程外の学校教育活動における補助**
- **上記以外の学校教育課活動の補助**
  - 教務関係（ICT関係・時間割・営繕・図書館など）
  - 特別支援教育（学校生活のサポート・学習指導など）
  - 個別への生徒指導（巡回指導・個別対応など）
  - 個別への教育相談（不適応・進路など）

「学校インターンシップ」の流れ

1月～3月
受け入れ希望校集約

4月上旬
募集ガイダンス
（R3年度は動画）

4月～5月
選考・許可

5月～6月
受け入れ校での
面談

6月中旬
事前指導

6月～12月
研修
事後指導

②選考・許可

- 以前は、希望者全員について別途の面談を行っていたが、令和元（2019）年度からの新カリキュラムからは、「学校教育総合演習」（3年次生必修の教職版ゼミ）の担当教員が面談し、送り出しの可否を判断（意欲や目的、GPA、事前・事後指導への出席など）。
- 「希望届」に第1～第3希望の学校を記載させ、全体での調整を経て、学生に発表する。

③事前指導

- 教育実習や介護等体験の事前指導との差異化を図るため、一部に「マナー研修」を組み入れている。

④研修

- 「学校インターンシップⅠ」（40時間以上）を履修し、9月に実施する学生が多い。
- 希望する学校種（教育実習の実習校）とは異なる学校種を選択する学生もいる。
- 研修中は、「研修日誌」の作成（簡易な形式にしている）
- 研修中の支援は、原則として「学校教育総合演習」担当教員が担う。

「学校インターンシップ」の流れ

実施年度	参加学生
平成22(2010)年度	93
平成23(2011)年度	88
平成24(2012)年度	52
平成25(2013)年度	75
平成26(2014)年度	74
平成27(2015)年度	89
平成28(2016)年度	59
平成29(2017)年度	74
平成30(2018)年度	62
令和元(2019)年度	71
令和2(2020)年度	中止
令和3(2021)年度	41

3年次以上に

平成25(2013)年度～令和元(2019)年度
平均で、70名ほどが参加
(免許取得者の約2割)

コロナ禍による中止

中止の可能性を含めて募集

「学校インターンシップ」参加学生の声

【3年生　公立小学校で9日間研修　他大学通信課程との連携プログラム受講者】

＜学んだこと＞

授業におけるICT活用やアクティブラーニングの重要性が高まっていることは知っていたが、具体的に、ロイロノートで班の意見をまとめたり、シンキング・ツールを使いながら意見を整理したりする様子をみて、ICT活用や子どもの主体性を促す学びのあり方を学ぶことができた。また、教師という仕事の魅力についても学ぶことができた。学校インターンシップで学んだことを活かしながら、子どもの成長の手助けができる教師になれるよう、今後とも教職の勉強や専攻の勉強を頑張ろうと思う。

＜次年度参加者へのメッセージ＞

参加する前は不安が大きかったが、参加して感じたことは、「学校インターンシップは行った者勝ち」ということです。テキストや（大学の）授業だけでは分からない、いろいろな先生方や子どもたちとの出会いがあり、本当に、一日一日が刺激的で、貴重な時間を過ごすことができます。

「学校インターンシップ」参加学生の声

【3年生　公立小学校で14日間研修　特別支援学校教員希望】

＜学んだこと＞

特別支援学級で研修を行ったが、一人ひとりの特性にあった接し方が必要で、先生たちが常にその場に応じた対応をしながら、子どもの成長を考えていることを学んだ。特別支援学校の教員を目指しているので、今回の研修で感じたことや自分の課題を忘れずに、来年度の教育実習や将来教員になった時に活かすことができるよう、しっかりと振り返っていきたい。

＜次年度参加者へのメッセージ＞

私たちの成長のために、忙しい先生方が様々なことを教えていただけます。授業だけではなく、休み時間などでの子どもと先生の関わりの中にもたくさん学ぶこともあります。教えてもらうことだけではなく、よい先生のよいところを盗んでいこうとする気持ちでいると、より成長できる機会になると思います。学校インターンシップは、教育実習前に学校現場の空気を感じることができる、とてもよい機会なので、ぜひ研修に参加してください。

「学校インターンシップ」参加学生の声

【3年生　公立中学校で5日間研修　中学校社会科教員志望】

＜学んだこと＞

主に社会科の授業見学を中心に研修を行ったが、同じ社会科であっても、先生方が使う教材や方法を変えて、各学年、各クラスに適した授業をしていることを学ぶことができた。また、クラス全体という集団を前に、クラス単位で物事を考えてしまい、生徒一人ひとりに着目するという視点が自分には欠けているという課題に気づくことができた。自分では気がつかなかった授業方法や教室のレイアウトにも着目して欲しいという現場の先生の視点なども学びながら、今の自分の視野の狭さを再認識し、将来教員になった際のビジョンを明確にしておくことが必要であることを学んだ。

＜次年度参加者へのメッセージ＞

5日間という短い期間であったが、日に日に変わる生徒の姿を間近で見て、教員としての喜びを感じることができた。コロナ禍で様々なイベントが延期となる辛い状況の中で、毎日の生活を少しでも楽しく、明るく過ごそうとしている生徒の姿を見て、自分の活力にもなった。学校インターンシップは今以上に子どもたちを好きになることができる絶好の機会なので、少しでも悩んでいる人は、是非参加してほしいと思う。

「学校インターンシップ」参加学生の声

【3年生　公立中学校で6日間研修　中学校保健体育科教員志望】

＜学んだこと＞

1から10まで教員が指示するのではなく、生徒たちに考えさせながら行動させるという、自主性を育むことの大切さを学びました。ただ、具体的にどのような声かけをしたらよいのか難しく、実際の学校現場で生徒と接しながら学んでいくものだと教えていただきました。これからは、大学だけの学びではなく、学校ボランティアなどにも積極的に参加し、生徒と交流する機会を作っていきたいと考えています。

＜次年度参加者へのメッセージ＞

教師になることを決めている人も、迷っている人も参加すべきだと思います。4年生の教育実習の前に体験することは、自分の将来を決める意味でも重要です。教師になることを決めている人でも、実際に生徒とコミュニケーションをとることで、今の自分に何が足らないのか、これからどのようなことを身につければよいのかに気づくことができます。3年生のこの時期（9月）だからこそ、ゆっくりと自分の将来と向き合うことができる、こんなチャンスはありません。

「学校インターンシップ」参加学生の声

【3年生　公立高校で長期分散型（100時間以上）　高校（地理歴史）教員志望】

＜学んだこと＞

先生方が授業以外の様々な場面で生徒をコミュニケーションをとり、生徒理解の重要性を学んだ。クラスによって、板書や説明の方法、問い方を変えたり、生徒の様子に合わせて授業をしていることが分かった。授業を一度だけ行ったが、知識を問うばかりで、生徒に考えさせる授業をすることができなかった。これからは、生徒が主体的に考え、他者と協働して深い学びにつながる授業をするために、専門の日本史をはじめ、社会科教育の専門的知識や生徒の実態に合わせた授業づくりの方法を学んでいきたい。

＜次年度参加者へのメッセージ＞

特に重要だと思ったのは、生徒とのコミュニケーションをとることと、目標や視点をもって研修に臨むことです。生徒との直接的な関わりは大学ではできないことですし、自分なりの視点をもって授業などを見学した上で、先生方に質問をすれば、丁寧に教えてもらえるので、とても勉強になります。学校では、生徒からも、先生たちからも「先生」と呼ばれるので嬉しい反面、それだけ責任があるということです。そのことも意識しながら、学校インターンシップを頑張ってもらいたいと思います。

「学校インターンシップ」の成果と課題

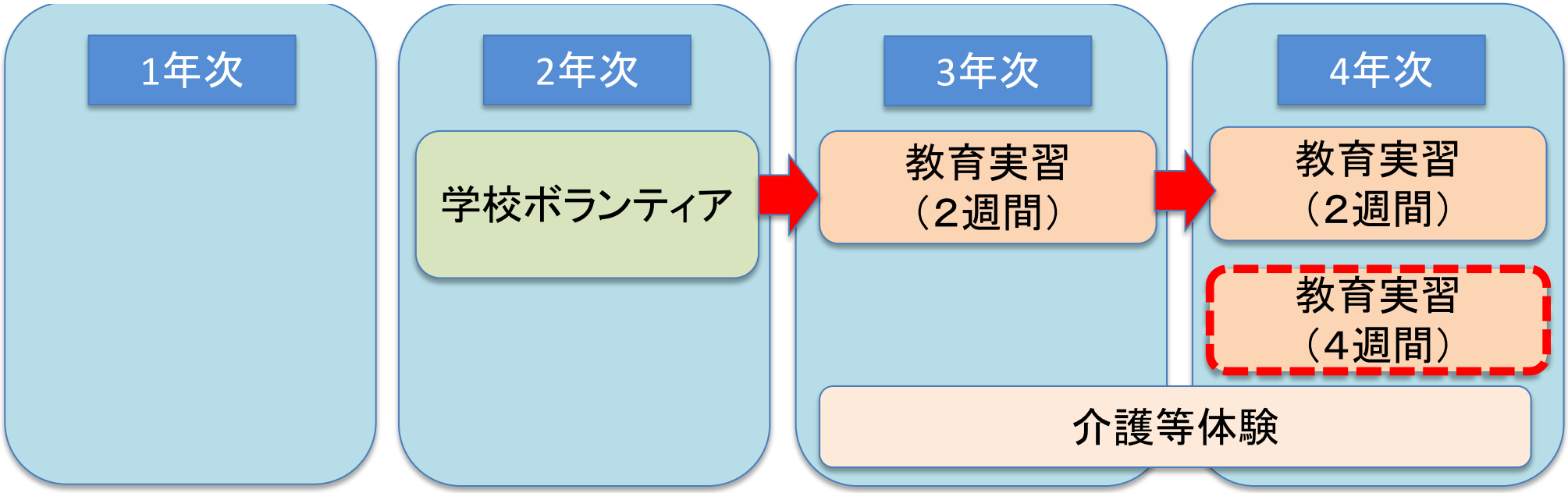
【成果】

- 多く学生にとって、教師としての自分自身の課題、今後の大学・教職課程での学びのあり方などについて考える機会となっている。
- 学校現場の「実態」を学びながら、大学の学びと往還させようとする意識が芽生えている。
- 「学校インターンシップ」終了後も、同一校に「学校ボランティア」として関わる学生が多く、学生と学校をつなぐきっかけともなっている。
- 「学校インターンシップ」履修者の多くが、教員採用試験にも合格し進路を実現している。

【課題】

- ✓ 学校種のバランスに配慮しながら、希望学生のニーズや数にみあう研修校を確保すること（所属キャンパスに近い学校に希望が集中する傾向）
- ✓ 受け入れ先の学校・教員による充実度の差の克服（「学校インターンシップ」についての理解度の差）
- ✓ 参加したくてもできない学生層への対応（各学部での専門の学び、時間割の制約、部活やサークル活動との両立、留学など）
- ✓ 「学校ボランティア」との差異化（活動内容面において）

小学校教員養成課程における実習系科目



キャンパス近隣の京都市立小学校（１２校）と連携

2年次：全学生が京都市立小学校（１２校）で「学校ボランティア」

3年次：京都市立小学校（１２校）と立命館小学校で「教育実習」（2週間）

4年次：基本的に出身校で「教育実習」　（2週間）

小学校教員養成課程における実習系科目

- ２年次「学校ボランティア」は、キャンパス近隣の京都市立小学校12校で全員が行う。
- 6月頃～年度末まで行うが、時間数などは、学生の授業や学校の都合の関係で学生ごとに異なる。
- 3年次の「教育実習」は、学生に希望や受け入れ校の意見を聞きながら、京都市立小学校12校と立命館小学校のいずれかにマッチングさせて実施。
- 4年次の「教育実習」は、受け入れ校の制限もあり、3年次時の実習と同一の学校ではなく、出身校での「教育実習」を原則に実施。

「教育実習」（3年次）参加学生の声

- 子どもへの向き合い方を学んだ。直接に注意するだけではなく、できている子を褒めることで子ども自身に気づかせることや、それぞれの子どもが何を、どこまでできるのかを見極めてから必要な支援や指示をすることなどを学んだ。子ども考えを引き出せるように意識はしたが、「答え」を言ってしまうことが多くあり、大きな反省点である。

- 算数の授業を経験したが、子どもたちの多様な反応への対処方法が難しかった。子どもの反応に対して「なるほど」と安易に相づちを打ってしまったが、その発言の中身について、単元で押さえるべき内容との関係で吟味しながら、より深く突っ込むのか、ゆさぶっていくのかなど、子どもの反応に合わせた対応ができるように、大学で学んでいきたい。

- 授業づくりなどで反省点は多いが、多様なことを学び、感じることができた10日間であり、今回学んだことをしっかりと振り返りながら、次年度の教育実習や将来に活かしていきたい。

「教育実習」（3年次）参加学生の声

- 将来教師になりたいという思いが一層強くなった。自分自身の成長も実感できたが、様々な事柄について学んでおく必要の重要性を感じ、実習後は、子どもや教育に関する学術書などをより積極的に読むようにしている。4年次の教育実習では、しっかりとした授業計画をたて、研究授業が行えるように学んでいきたい。

- 授業目標（めあて）を達成するために指導計画を作成することが基本であることは知っていたが、実際に行った授業では、教科書内容をそのまま伝えるだけになってしまい、めあての達成には不十分であった。授業観察の中で、先生方が多くの工夫をしながら授業をしていることが分かり、子どもの様々な実態に対応しながら、めあてを達成する授業を行う方法を考えていきたい。実習での経験を、模擬授業を行う際にも活かし、よりよい授業ができるようにしていきたい。

分散型実習の成果と課題

【成果】

- ２年次「学校ボランティア」→３年次「教育実習」→４年次「教育実習」という一連の実習系科目の中で、各段階で学生が個々の課題に気づき、大学の学習で補いながら次の実習に向かうことができている。

- （大学の）クラスごとに専門教員の指導のもとで振り返りを行うことで、個々の課題や改善の方策について明確にしながら学習をしている。

- 早期に学校現場に関わることで、教職課程での学びの意義や、自己の課題克服のために必要なことを意識した学びができるようになる。

- ４年次において時間的な余裕ができ、　４年次後期に実習が振り分けられるという問題も克服できる。

- 複数の学校で実習することで、学校や子どもの理解が深まっている。

分散型実習の成果と課題

【課題】

- それぞれの実習が2週間であるため、子どもとの信頼関係ができ始めた段階で実習が終わってしまう。教職大学院のように、長期に同じ学校に関わり、分散型の実習を行うことは、受け入れ校との関係でも難しいため、実習の「深まり」をどう考えるのかが課題ともなっている。

- 3年次の「教育実習」と4年次の「教育実習」の到達目標の違いを、指導担当教員に理解してもらうことの難しさがある（3年次実習でも、4年次実習と変わらない指導を受ける場合もある）。

- 目的養成の専攻であるとはいえ、「学校ボランティア」「教育実習」「介護等体験」の履修と、これらを履修するための先修条件をクリアーするための科目履修のため、教職以外の多様な学びとの並行が難しい（たとえば、大学在学中に留学などを希望する場合には、4年間での免許取得が困難になる）。

まとめとして

- 教育実習の前に「学校インターンシップ」を経験したり、教育実習を分散型で行うことは、学生の成長にとって効果的であると考えられる。
- 開放制教員養成における学生の多様な学びを保障するために、一本化することの難しさもある。
- 「教育実習」「学校ボランティア」「学校インターンシップ」「介護等体験」など、様々な学校を体験する活動が併存しているので、「事前・事後指導」のあり方なども含めて、目的や内容の差異化を明確にしていく必要がある。
- 自治体による受け入れ方法の差異に対応していく必要もある（たとえば、大学の責任で学生の送り出しを求める「学校ボランティア」など）。
- 様々な形で学校で活動する学生が増え、大学によっても方法が異なるため、受け入れる学校も、各活動の目的を区別して指導することが難しくなっていることが推測され、双方の理解・合意形成を図ることも必要。

ご清聴、ありがとうございました。